中山家本源氏物語の表現

中村一夫

一　本文と読み

伊井春樹は「陽明文庫本源氏物語の方法」（「国語国文」一九九三年一月）という論文で、現在最もよく読まれている青表紙本系の源氏物語の世界に対して、未整理のまま排斥されているといっていい状態の別本の世界の読みを試みた。その結びで「まず一つ一つの本文で作品を読み、その本文が持つ物語の世界を闡明にすることが緊要だろうと思う」と述べている。異同の問題は伝本の成立や継承関係、享受者・書写者層にも関わってくるであろうが、別本の性質の解明に語彙や語法の調査とともに、その伝本の本文がいかなる世界を現出させているのかを明らかにすることが重要であるとの指摘はゆるがせにはできない。

一方、各伝本に即した東屋巻の一節の詳細な読みを試みた加藤昌嘉は、「今回考察したケースにおいて、《青表紙本》《河内本》《別本》の三分類は何らの物差ともならなかった」（「源氏物語本文揺動史」、「国語と国文学」二〇〇五年三月）と述べ、「『源氏物語』とは、それぞれに揺れ動きそれぞれに読み継がれる、共時的かつ通時的な動態の総称なのであって、個別の読解もないまま異同のデジタル化を図ったり、一つの写本だけに依拠した読解を行ったりするような発想は、そもそも物語なるものの本性に齟齬していると考える」とする。そして狭衣物語や住吉物語などに比して揺れ幅の少ないこの物語を研究するのであれば、「こうした振動の幅はすべて見据えた上で、中君論だの浮舟論だのを物したい」と結んだ。伊井の指摘したところからの延長線上にある発展的な発言として、こちらもまた示唆に富むものであろう。

ことは源氏物語の本文研究だけに留まらない。なぜならばすべての研究の拠り所として本文があるのであるから。しかしながら、伊井や加藤らの先鋭的な発言を自らの内なる問題として研究に反映させたものはいったいどれほどあったであろうか。池田亀鑑が便宜的に設定した源氏物語の本文系統を無効化し、今一度それぞれの伝本の質を測定し価値を認めていく。こうした当たり前の作業が、いまだにごく一部

の研究を除きなされていないとおぼしい。阿部秋生の「諸本の本文の系統を分類・整理する規準は、諸本の形態的特徴にも注目すべきだが、本文そのものを比較・検討することによって本文的特徴を捉えることを基本とすべきだ」（「諸本分類の規準」、『源氏物語の本文』一九八六年）という提言をも改めて想起すべきであろう。

本稿は伊井、加藤、阿部らの提言を受け、若紫巻を通して源氏物語の本文のありようと伝本相互の関係を考えるものである。調査に使用したのは伊井春樹編『CD-ROM 古典大観源氏物語』（一九九九年）・池田亀鑑編『源氏物語大成』（普及版一四冊、一九八四年～一九八六年）・刊行会編『源氏物語別本集成』（全一五巻、一九八九年～二〇〇二年）・加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』（二〇〇一年）である。[1] なお引用本文には任意に句読点、各種記号を施した。

二　藤壺懐妊の描写はひとつか

若紫巻は光源氏の北山行きの記事で始まり、彼が何らかの抜き差しならない理由で瘧病を罹患したことをうかがわせている。物語を読み進める読者は、やがて発病の要因の一つが藤壺との秘めた関係や彼女への思いであることを知ることになる。北山での養生を終えた源氏は都へ戻り、折しも病で里邸に退出していた藤壺に接近を試み短夜を過ごした。四月のことである。それから三ヶ月目の六月にはお付きの者の目にもはっきりわかるほどの妊娠の兆候が現れるのであった。

1　三月許になれは、しるう見たてまつりしる事もありて、
2　人はおもひもよらぬ事にて、
3　いまゝてそうせさせ給はさりけるときこゆるに、
4　あさましかりける御身のすくせのほと、いかゝをほししらさらん。
5　御ゆとのなとの程にもしたしうつかまつりて、
6　何事の御けしきもしるくみたてまつりしれる御ちぬしの弁、命婦はかりそ、
7　あやしう思ひわく事あれと、かたみにいひあはすへき事ならぬは、
8　猶のかれかたかりける御すくせをあはれに思。（中山家本）

妊娠三ヶ月ともなれば、藤壺の体調と姿形の変化は歴然としており、もはや誰しも知るところとなった（1）。お仕えする者どもは思いも寄らぬこととあわて、今まで桐壺帝に懐妊の件を奏上しなかったことよと申し上げている（2・3）。そして、驚き呆れるほどの我が身の宿縁のほどを、藤壺はどのようにも思い知っていらっしゃらないのか（4）と、こちらは物語の語り手が評する。お湯殿などの際にも身近にお仕え申し上げて（5）、藤壺のどのようなご様子もはっきりと存じ上げている御乳母子の弁と王命婦ばかりは（6）、「おかしい」と思い当たることもあるけれど、お互いに口にすべきことでもないので（7）、やはり逃れられなかったお二人のご宿縁を感に堪えないと思っている（8）。

藤壺懐妊という突然の出来事に対し、驚き慌て騒ぐ人々を描く。本

来ならば慶事ゆえ盛大にお披露目がなされ祝われるべきところ、異変を察知した弁や王命婦たちは互いに何も言うことなく心一つに収め、彼ら二人の宿縁の深さにしみじみと感じ入っている。このくだりでは、藤壺が懐妊のことを帝に奏上しなかった点について驚きを隠さないけれど、話し手も含めて彼女の行為そのものを激しく糾弾する、もしくは嘆きを招くものとしては描いておらず、むしろ（8）に見える「あはれ」に象徴されるような、どちらかといえば二人の縁の避けがたい必然性を受け入れるばかりか、さらに称揚の気配すらうかがわせる心情を印象づけられる。

先の本文は鎌倉時代書写の中山家本のものであるが、しかしながら、かつての源氏との逢瀬を「あさましかりしこと」と振り返る藤壺がまたしても犯してしまった行為とさらには子までなしたことに対し、広く知られている青表紙本系源氏物語では強い口調で咎め立てをしていたのではなかったか。

1　三月になり給へは、いとしるきほとにて、人々見たてまつりとかむるに、あさましき御すくせのほと心うし。
2　人は思ひよらぬことなれは、
3　この月まてそうせさせ給はさりける事とおとろききこゆ。
4　わか御心ひとつには、しるうおほしわく事もありけり。
5　御ゆ殿なとにもしたしうつかふまつりて、
6　なに事の御けしきをもしるく見たてまつりしれる御めのとこの弁、命婦なとそ、
7　あやしとおもへと、かたみにいひあはすへきにあらねは、
8　なをのかれかたかりける御すくせをそ命婦はあさましとおもふ。

（大島本）

現在刊行されている主要校注本[2]の多くで底本とされている大島本の本文である。先の中山家本と比べて注目すべき箇所に傍線を付した。まず（1）では、妊娠三ヶ月におなりになると、その兆候ははっきりとしたほどで、お仕えする人々がお見受けして不審がるので、思いも寄らない宿世のほどがあまりにも嘆かわしいとあって、先の中山家本ではただそれが人々に知られるようになったことだけの客観的叙述であったところ、周囲の人々の「とがめ」や自らの「心うし」という感情などのマイナス評価に傾く姿勢が打ち出されている。ただここに見える「あさまし」や「すくせ」は、中山家本では（4）に語り手の推し量りとして現れている。また（3）でも桐壺帝に妊娠の事実を報告しなかったことへの驚きを、「おどろききこゆ」と明示的に述べている。さらに（4）は大きく異なる部分で、中山家本が語り手の立場から現在の藤壺の心情を忖度するのに対し、大島本では紛れようのない源氏との密会をはっきりうかがわせる彼女の心模様がそのまま提示されている。

小さな異同が散見する（5）から（7）を経、（8）では再び大きな違いを見せる。唯一秘めた関係を知る王命婦は、逃れがたい源氏と

藤壺の宿縁を、先の中山家本では「あはれ」と思っていたところ、大島本では「あさまし」と感じている。「あさまし」は本居宣長が「此詞は、よき事にも、あしき事にもいひて、俗言に、けしからぬきものつぶれたことなどいふ意也」（源氏物語玉の小櫛）と説くが、もともとはあまりのことにあきれ、嫌悪し不快になる気持ちを表わすことばとして使われるもので、後世転じて驚くばかりのすばらしさを表わすようになったという。[3] ここの命婦の感じる「あさまし」は、直前の世間の人々の反応や源氏と藤壺の様子などから決してよい意味で使われているとは思われない。まさしく宣長のいう「けしからぬきものつぶれたこと」に対する不快感や嫌悪感を表わしていると解釈するのが妥当だと思われる。命婦の心中が不快嫌悪の「あさまし」で表現されることで、藤壺の行為や光源氏とのあやにくな関係をよしとしない立場が大島本では鮮明に示されているといえよう。

三　物語の論理と作中人物のありよう

先の（8）のくだりを『源氏物語大成』『源氏物語別本集成』『河内本源氏物語校異集成』で通覧してみると、御物本・横山本・榊原家本・池田本・肖柏本・三条西家本・麦生本・阿里莫本・保坂本・国冬本などが大島本に近い本文であり、陽明文庫本・七毫源氏・高松宮家本・尾州家本・鳳来寺本・大島本（中京大）・岩国吉川家本などが中山家本とほぼ同じものであった。湖月抄は大島本に準ずる。また（1）から（7）についても、小異はあるものの両者は同様のグループとなり対立を見せていた。

この箇所に関して、かつて伊藤鉄也が「『御宿世を、あはれに思ふ。』とする中山家本・河内本は、『御宿世をぞ命婦はあさましと思ふ。』という青表紙本とは、明らかに命婦の判断に相違を見せる。しみじみとした情感を意味する『あはれ』と、嘆かわしさを示す『あさまし』では、後者の方がここでは適切な用語である」としていた。[4] もちろん諸本を比較し、本文の文学的価値を云々することに否定的なわけではない。しかしながら、なぜこの場面では「情感」より「嘆かわしさ」が適切であると判定できるのか。現代源氏研究の一視点による印象批評的な価値判断のもと、これら諸本を評価する前に、中世から近世初期の源氏物語流布のありようとそれぞれの本文の世界観をそのまま認める必要があるのではないだろうか。源氏や藤壺へ批判のことばを避けている中山家本や陽明文庫本などが「あはれ」としみじみとした情感で二人の関係を描くのも、この本文を持つ物語世界の論理としては一貫した表現といえるだろうし、また大島本は大島本で「あさまし」を繰り返すなどして、きちんと筋が通っているのである。

たとえば次のくだりなども優劣ではなく伝本内部で呼応し連動する論理的必然の産物として捉えることで、その表現意図はより明確になってくるであろう。

いとゝしくいみしき事のはつくしきこえ給へと、命婦もおもふに、いとむくつけうわつらはしさまさりて、さらにたい（「い」ヲ見

消シテ「は」かるへきかたなし。（大島本）

いとゝしういみしき事ゝもをきこえつくし給に、命婦も思に、いとゝつゝましさゝりて（「ゝりて」ママ）、さらにたはかるへきかたなし。（中山家本）

源氏は藤壺懐妊のことを聞き合わせて、先に見た奇妙な夢との符合からそれは自分の子供だと確信する。そして何とか藤壺に逢おうと仲立ちの命婦を介してことばを尽くすのであるが、その源氏の行動に対する命婦の思いを述べる形容詞の類に違いがある。大島本では「むくつけうわつらはしさまさりて」と「むくつけし」および「わづらはし」の語幹に「さ」のついた「わづらはしさ」がある。一方の中山家本は「つつましさ」一語が見える。なお両本の表現の異同の図式は先に示した二つのグループと同じものであった。

ここで形容詞の性質について触れておく。山本俊英は「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」（「国語学」第二三号、一九五五年一二月）という論文で、形容詞の両活用形を比較したとき、概してク活用は状態的、シク活用は情意的という意味の差があると述べた。もちろんすべての形容詞が判然と分類されるわけではないが、この区分はおおむね有効であるといえよう。とすると、大島本に見えるク活用の「むくつけし」は状態性形容詞であるといえそうである。確かに「むくつけし」は「鬼や物の怪などのように、形や性質・状態が異様で不気味である意」（『岩波古語辞典』）などとあり、これを状態性形容詞として解説している。ところが、「むくつけし」という形容詞をよく考えてみると、これは「不吉だ」という対象の客観的事実の表現として、「山が高い」「花が赤い」の「高い」「赤い」などと同様に考えられる一方、そう知覚認識する主体を主語として想定することによって、対象の客観的属性だけでなく、主体の主観的感情「気味が悪い」をも同時に表現していると見ることができるだろう。この種の主観客観の混合表現は早く時枝誠記が指摘するものであった。[5]「むくつけし」とともに使用されるシク活用の形容詞「わづらはし」もまた、主体の感情に傾きながらも同時にそう感じさせる対象の属性をも表現する形容詞であると考えられる。したがって、この部分の読みとしては、光源氏の行動そのものの性質とともに、それに対する命婦の批判的な印象をも語っていると解釈するのが穏当であろう。いずれにしても光源氏への積極的な批判の言辞が連ねられているのである。

ところが、中山家本ではシク活用の情意性形容詞である「つつまし」を使って、命婦自身の判断「つゝましさまさりて（慎重さがまさって）」というだけで、大島本にあるような源氏への批判的印象や負の属性はいっさい述べられない。もちろん語られない背景には大島本と同様な心情があったからこそ命婦も「つゝましさ」がまさっているのだと思われるが、あくまで表現されたものに注意するならば、大島本では源氏を批判することばがあるのに、中山家本などではそれを欠いているといえるのである。どちらがよいというものではなく、先の藤壺懐妊

のくだりに見え隠れする論理に照らし合わせると、それぞれの伝本の表現に一貫した論理や整合性を見ることができるのであった。物語の方法などもそうした観点から語られるべきであろう。

次の引用にある二人の密会直後の描写も、同様に伝本内部の論理の展開による表現と解釈することができる。

殿におはしてなきねにふしくらし給ひつ。御ふみなともれいの御らんしいれぬよしのみあれは、つねのことなからもつらういみしうおほしほれて、うちへもまひらて、二三日こもりおはすれは、又いかなるにかと御（「心」ト朱筆デ補入）うこかせ給へかめるも、おそろしうのみおほえ給ふ。（大島本）

殿にをはしてやかてなきねに日一日ふしくらし給。御文なともれいの御覧しいれぬさまにのみあれは、めつらしからぬ事なれとつらくいみしうおほされて、内にもまいり給はす。三四日こもりをはすれは、うゑはまたいかにと御こゝろをうこかしをはしますも、さま〳〵をそろしうおほえ給。（中山家本）

これは藤壺との密通の直後、自邸に戻った源氏の様子を語る部分である。「つねのことなから」と「めつらしからぬ」、「うこかせ給へかめる」と「うこかしをはします」などの異同にも注意されるが、ここでは数字を含む箇所に着目したい。中山家本は源氏が藤壺との逢瀬の後、ひたすら泣き暮らしていることを「日一日」と限定することで具体的にその動作や心情を強調している。この本文は大島本を含め他本にはいっさい見られない独自異文である。源氏の苦悩や悲しみをより鮮明にかつ具体的に表現しようとしている姿勢の現われであるといえよう。さらに続くところで、源氏が二条院に篭もって内裏へ参上しない日数も、大島本など諸本すべてが「二三日」とするところ、中山家本のみ「三四日」と長くなっている。こうした数字の違いは実はよく見られるもので、異同としてことさら取り上げるほどの珍しいものではないが、ここまで考察してきた中山家本の構築する論理、すなわち源氏に寄り添いながらより深く同情的に描くというものを想起した場合、中山家本の選択する表現相互の整合性を看取することができる。

たとえ特異な表現であっても、それを他本との比較から異端のものとして、ましては単なる誤写や劣った表現などとして切り捨てるのではなく、なにゆえその本文が選びられているのかを、伝本内部の論理や展開に即して解釈していかなければならないと考える。

四　紫上は純真無垢な少女であるか

本節では特に待遇表現に注目する。諸本間の待遇表現の異同はしばしば見られるものである。近年、古代の待遇表現を硬直した体系としてではなく、柔軟で動的な運用を許す形式として見直す試みが目立ってきている。つまり厳然として屹立する待遇表現の体系・ルール・原則というものを踏まえた上で、言語活動の行われている場に密着した

解釈と理解が進められているといえよう。すなわちこれらは諸作品の論理に組み入れられた方法としての待遇表現を明らかにするというものである。[6] 待遇表現は物語の展開そのものに影響を与えるということは少ないものの、明らかに物語の色合いを変化させることになる。たとえわずかであっても異同の示唆するものを読み取るのは、各伝本の性質を明らかにするのに欠かせない作業であろう。たとえば次の例。これもまた二つの本文が対立する。

「なそこえさらん」とうちすしたまへるを、身にしみてわかき人々おもへり。（大島本）

「なそこひさらん」とうちすむし給へるを、わかき人々はみにしみてめてたしと思ひきこえたり。（中山家本）

これは光源氏に関する描写である。紫上の祖母である尼君の物忌みの期間が過ぎて、一族は既に京の邸に戻っていると聞いた源氏はそこを訪れる。そこでの少納言とのやり取りを聞いた若い女房たちが源氏のことをどのように感じたのかというくだりである。ここで中山家本の本文末尾をみると「きこゆ」という謙譲語があり、これは大島本には見えないものである。源氏その人は敬語で待遇すべき高貴な人物であろうが、二つの本文を比較すると、中山家本の世界での源氏の方がより高く扱われているということになるであろう。それに連動する表現として中山家本には「めでたし」という形容詞も見える。「めでたし」は平安時代の美を表わすことばの中でも、理想性特異性卓越性を有する最高ランクの美を意味するといわれるものであり、源氏物語の中でも限られた人物にしか使われることがない。[7]「きこゆ」とあいまって、中山家本が源氏をより高く位置づけていることの根拠になる例であると思われる。

中山家本は前節でも確認したように源氏に対して好意的な描写をする傾向にあり、彼に関するこうした例は枚挙にいとまがないほどである。これは大島本が源氏といえども他者との関係の中で相対的に描写しようとしているのに対し、中山家本では源氏を絶対的な存在として位置づけようとする傾向あるいは姿勢があるからだと考えられる。これは先に見た藤壺との密通事件をめぐる叙述の部分でもよくうかがえた。

時枝誠記が指摘するように、待遇表現もまた一部の形容詞と同様に主観客観の混合表現であり、事物のありかたに対する表現主体の特殊なる把握の表現である。[8] したがって物語に使用されている待遇表現に異同があって、なおかつ登場人物の関係に変化がなければ、それは言語化した表現主体の対象把握に変化があると考えざるをえない。つまり待遇表現をつけているというのは、話し手が当該の作中人物を高く待遇すべき高貴な人物だと主観的に判断しているのである。逆に敬語で待遇された作中人物の側からいえば、それだけの素養なり地位なりを持った人物であるということを客観的に定位されているのである。

かつて享受意識が本文の異同を生むという考えで、主に待遇表現の主観的側面から本文の特徴を考察したのであるが、[9]以下ではもう一つの客観的側面、つまり描かれた物語世界の読みを中心に考察を加えることとする。

続いて源氏、藤壺以外の人物について取り上げることにする。若紫巻での重要な作中人物といえば、やはり紫上であろう。北山で発見されたこの子供は源氏が恋慕う藤壺によく似る美しい少女であった。「紫のゆかり」としてこの後の源氏の行動を規定していく役割を持っているという点から、源氏物語の長編的構想の面で極めて重い位置を占める人物である。その人物は各伝本でどのような姿で描かれているのであろうか。まずは紫上が北山で初めて源氏に目撃される場面の描写をあげてみる。

あまきみのみあけたるにすこしおほえたるところあれは、こなめりとみ給。（大島本）

あま君のうちみあけ給へるまみのすこしおほえ給へれは、こなめりとみ給。（中山家本）

源氏は惟光とともにかいま見をしており、雀に逃げられて泣いている少女が先ほど見かけた尼君に似ているところから、子供であろうと推し量るくだりである。中山家本は「うちみあけたまふ（見上げていらっしゃる）」「おほえたまふ（似ていらっしゃる）」という具合に尼君や紫上に待遇表現を使っている。陽明文庫本・七毫源氏・高松宮家本・尾州家本・鳳来寺本・大島本（中京大）・岩国吉川家本などが中山家本とほぼ同じものであった（陽明文庫本のみ「みあけ給へる」という本文を持つ）。一方、大島本には待遇表現が見えない。御物本・横山本・榊原家本・池田本・肖柏本・三条西家本・麦生本・阿里莫本・保坂本・国冬本などがこちらを支持する。

これまで源氏物語においては人物の素性が明らかになるまで待遇表現を使用しないという筆致が物語の方法として理解されている。尼君も紫上ももちろんまだその素性は明らかにされていない。さらにここでは高貴な源氏の視点からという相対的な面からも待遇表現は使用されないはずである。[10]先に述べたように、かつて私はこの点について諸伝本の書写者の物語の先行理解がこうした待遇表現の付加を招いているのではないかと考えたが、[11]ここで試みているようにそれぞれの伝本を完結した世界として読むならば、中山家本や陽明文庫本では尼君やこの泣いている少女を、最初から高く待遇すべき地位・身分の人物として登場させていると読むことができるであろう。さらにはこの北山の人々に好意的かつ近しい位置にある話し手の存在も想定できる。大島本などとの間には明確な立場、視点、方法の違いが読み取れるだろう。

先のくだりの直後にある紫上の呼称にも注意したい。大島本が「このこ」とあるところ陽明文庫本では「この君」とある。中山家本はこ

の部分を欠くが、対象の捉え方という点で違いが見える。呼称の異同も諸本の性質を知る有力な手がかりとなる。もう一例、紫上登場の場面からあげる。

「つみうることそとつねにきこゆるを、心うく」とて、「こちや」といへはつるゝたり。つらつきいとらうたけにて、まゆのわたりうちけふり、いはけなくかいやりたるひたいつき、かむさし、いみしううつくし（大島本）

「つみうる事ゝつねにきこゆるものを、心うや」とて、「こちや」とのたまへはついゐ給。つらつきおもやういとらうたけにて、まゆのわたりうちけふり、いわけなうかきやりたるかむさし、ひたひ、いみしうをかしけにて（中山家本）

「つみうることゝつねにきこゆるを、こゝろふや」とて、「こちや」といへはついゐたり。つらつき思やういとら△たけにて、まゆのわたりうちけふり（りナゾリり）、いはけなうかきやりたるかんさし、ひたい、ゝみしくうつくし（陽明文庫本）

「つみうることゝつねにきこゆるを、心うや」とて、「こちや」といへはついゐたり。つらつきおもやういとらうたけにて、まみのわたりうちけふり、いはけなうかきやりたるかむさし、ひたい、ゝみしくうつくし（尾州家本）

やはり待遇表現と形容詞の使い方に関するものである。尼君にいつまでも子供じみていることを叱られる紫上であるが、この両者に対して大島本では待遇表現がなく、中山家本では待遇表現が使われる。なおここで待遇表現「のたまふ」「たまふ」が使われる本文を持つのは中山家本だけである。先に引いたものと同じく、大島本では一貫して未知の人物を源氏の視点から無敬語で物語っており、中山家本では源氏の視点というよりは、そこから少し離れてより紫上らに近い位置にいるであろう話し手が、待遇表現を使って高貴な人物であることを示しながら語っていると受け取れる。さらに引用した最後の部分の紫上の髪の描写の異同であるが、ここで「をかしけ」を使うのは中山家本だけであり、この直前で祖母尼君の髪を「をかしけに」としていたのは他に陽明文庫本、尾州家本などである。同じ評価語を用いて血縁にある者を感じさせるという点では中山家本には整合性はあるといえよう。対する大島本は一貫して「うつくし」であった。これもそれぞれの世界を認めていく必要を思わせる箇所である。

これまでの例は主に地の文からであり、表現主体である語り手が対象をどのようにとらえているかということが知れるものであった。次に引くのは作中人物の会話の部分であり、これは発言者の人間像をうかがわせるものになる。

あなたよりくるをとして、「うへこそこのてらにありし源氏のきみこそおはしたなれ、なと見たまはぬ」との給ふを、人々いとかたはらいたしと思ひて、「あなかま」ときこゆ。（大島本）

松尾聡「紫上――一つのやゝ奇矯なる試論――」（「解釈と鑑賞」一九四九年八月）以来、特に初期の紫上の人物像については理想的といわれる反面、現実性のない空疎な内容の人物であるという評価がほぼ定着している。秋山虔は「紫上の初期について」（『源氏物語の世界』一九六四年、所収）において松尾の延長線上で紫上を捉え論じ、「現実性を捨象した、こうした作りもののような人間像」と述べ、その人物造型の基底には帚木巻の「ただひたぶるに児めきて、柔らかならむ人を、とかくひきつくろひては、などか見ざらむ。心もとなくとも、直し所ある心地すべし」というものがあることを指摘した。それゆえに紫上はこの条件にしばられて物語の世界で自由に成長することができなかったというわけである。物語の進展に伴う紫上の人間的な成長はさておき、諸家のいうひたすら純真無垢な少女という姿が青表紙本系での紫上の造型であるということに異論はないであろう。

北山から都へ帰ってきた尼君の屋敷を源氏はさっそく訪れて、紫上の引き取りのことを再度願い出た。色好い返事をもらえない源氏は「せめて一声だけでも」といったまさにその時向こうから誰かの来る音がする。源氏の来ているのを知って無邪気に喜ぶ紫上は「このてらにありし源氏のきみ」をどうして御覧にならないのかと思ったまま口にしてしまう。先に女房らが「もう寝ていますので」と苦しい嘘をついていることなどお構いなしの様子に、みんな閉口して「静かに」と苦々しい思いで制止するばかりである。大島本の本文（御物本・横山本・榊原家本・池田本・肖柏本・三条西家本・国冬本）で読む限り、そこには松尾や秋山らの指摘するような雨夜の品定めで提示された条件を持つ女性、無邪気な紫上の姿が浮き彫りにされているといえよう。ところが、同じ箇所を中山家本で見ると、以下のようになっている。

あなたよりくるをとして、「上こそこの寺らにをはせし源氏の君こそをはすなれ、なとの給はぬ」と、いとうつくしきこゑにての給を、いとかたわらいたしと人々思ひて、「あなかま」なときこゆるなるへし。（中山家本）

見られるように紫上の発言に大きな違いがある。紫上の発言の中で大島本では源氏の存在することを「ありし」といい、中山家本では「をはせし」と待遇表現を使用している。陽明文庫本をはじめ保坂本、尾州家本なども同様の本文を持つ。二つの本文を比較すると、大島本は光源氏という待遇すべき人物への心配りを欠く無邪気な紫上像を語っており、それ以外の本文では状況や場面にふさわしい話のできる、礼をわきまえた人物として描かれているということができるであろう。その直後で紫上の声を「いとうつくしきこゑにて」と評価するのは、これも大島本と異なる本文を持つ諸本である。つまりここでも中山家

本などでは紫上のことを登場時から既にある程度の美質を備えた人物として描いているのである。これらの本文から伝本によって紫上の人物造型に違いのあることが了解されるであろう。

ものよりおはすれは、まついてむかひてあはれにうちかたらひ、御ふところにいりゐて、いさゝかうとくはつかしともおもひたらす（大島本）

ものよりをはすれ△、△ついてむ△△てあはれにうち△…△、いさゝかはつかしき物とも思たま△△（中山家本）　（△は判読不能）

ものよりをはすれは、まついてむかひてあはれにうちかたらひて、御ふところに入ねて、いさゝかうとくはつかしきものともおもひたまはす（陽明本）

中山家本に損傷があり、判読不可能な箇所が多い。陽明文庫本の本文を併せて引用した。源氏に引き取られた紫上は今や完全に二条院の人になっている。源氏が留守で寂しい夕暮れなどは尼君を恋しがって泣くこともあるが、父の兵部卿宮を思い出すことはないという。そしてこの後の親である源氏にすっかりなついて、寝る時も懐に入って少しも嫌だとか恥ずかしいとか思わない。大島本の本文（御物本・横山本・榊原家本・池田本・肖柏本・三条西家本・国冬本・保坂本）でこの部分を読むと、文の閉じめのところで「はつかしともおもひたらす」と待遇表現を使わず、ここから話し手の立場は紫上を未だ敬語で待遇すべき高貴で成熟した人物としていないことがわかる。ところが、中山家本や陽明文庫本を見ると、「おもひたまはす」と紫上に尊敬語でもって待遇している。無邪気な紫上像を期待する立場からすれば、大島本の本文は紫上の行動と話し手の評価が一致してまさにふさわしいものといえるが、一方で中山家本や陽明文庫本の本文を完結した世界の表現として読むと、その素行や育ち、地位身分などとは無関係に、紫上をきちんと高貴な人物として取り扱おうとしていることがうかがえるのである。

いまは待遇表現を追いかけただけではあるが、大島本（または通行校注本）に描かれている紫上の無邪気な少女としての姿は、もはやすべての源氏物語の伝本に保証されたものではないことを認めざるをえない。諸本による本文の異同は物語の筋を変えてしまうほどのものではないが、微妙な色合いというものは確実に違うといいえる。

大島本の無邪気で純真無垢な少女としての紫上像とは異なり、中山家本や陽明文庫本の若紫巻では登場当初から一定の美質を兼ね備えた少女として語り出され、話し手からも待遇を受けて語られる存在として描写されている。そしてそれらの伝本の内部では矛盾もなく整合性を持って語り通されているといえるのである。これは本文の質や優劣とは別の問題として、意識しておかなければならない点であると思わ

れる。

右の傾向は前節で検討した形容詞の使われ方を見ても確認できる。ここまででもすでにいくつかの形容詞に検討を加えたが、諸本によって使用される形容詞が変わるだけでなく、ある伝本にないものが別の伝本に見られたりと、その異同の様態はさまざまである。形容詞は形容されるものの性質を表現し、規定するものであるから、一語の異同であっても対象の性質を考える時には影響の大きいことがあると思われる。

次の例などは作中人物への評価（または共感）をうかがうという意味において、見逃すことのできない異同であろう。

ことはおほかる人にて、つき〳〵しういひつゝくれと、いとわりなき御ほとをいかにおほすにかと、ゆゝしうなむたれも〳〵おほしける。（大島本）

ことはある人にて、おほかたの御ありさまなともつき〳〵しかるへきさまにいえと、いとわりなき御ほとをいかにおほすにかとそ、たれも〳〵おほしける。（中山家本）

これは源氏が北山から帰京した翌日に、紫上の引き取りを手紙で僧都と尼君にお願いする。しかし、よい返事が貰えないので二三日後に惟光を遣わして様子をうかがわせるという叙述に続く部分である。「ことはおほかる人」とは惟光のことであるが、彼が口達者に源氏の胸中を説明すればするほど尼君らはみんな誰もが「ゆゆし」と不吉に思うのである。「ゆゆし」の原義には神聖なものへの強い畏怖心があろうが、ここでは年端のいかない少女を求める源氏の行動へ明らかに不吉な感情を抱いていると解釈できる。ところがこの「ゆゆし」が中山家本には見えない。中山家本ではただ「源氏の君はどう思っていらっしゃるのであろうか。」と語るだけである。つまり中山家本ではここでも源氏への批判的言辞を欠いているのである。もう一例、紫上の髪の印象を語るくだりから。若紫巻でこの少女の髪の印象を繰り返し述べるのはよく知られたところである。

なに心もなくゐたまへるに、てをさしいれてさくり給へれは、なよゝかなる御そに、かみはつや〳〵とかゝりて、すゑのふさやかにさくりつけられたる、いとうつくしうおもひやらる（「る」ノ補入アリ）。てをとらへたまへれは、うたてれいならぬ人のかくちかつき給へるはおそろしうて、「ねなむといふものを」とて、しひてひきいり給につきてすへりいりて（大島本）

何心もなうてゐたまへるに、てをさしいれてさくれは、なよゝかなる御そに、かみはつや〳〵とかかりて、すゑのふさやかにさくられたる、いとをかしうゝつくしう思やらる。御てをとらへ給へれは、うたてれいならぬ人のかくちかつき給へるをゝそろしうお

ほして、「ねなんといふ物をとて、せめてひき入給につきてやかてすへり入給（中山家本）

源氏のことを父兵部卿宮と勘違いした紫上を源氏が手を差し入れて探ってみるというところである。ここで中山家本には紫上の髪の印象を表現するのに大島本の「うつくし」に加えて「をかし」が見えている。陽明文庫本も中山家本と同じ本文を持つ。大島本の本文より紫上の美質の評価をより高める物言いになっているといえる。また普段からなじんでいない人物から手をつかまれることに対して「おそろし」と感じているが、それを受ける部分に「おほす」という尊敬語を中山家本や陽明文庫本などでは使用している。これは先に考察した待遇表現の使用に関する異同であるが、「をかし」ともども紫上を称揚するものとして、その傾向においてこれまで掲げてきた諸例のありようと軌を一にしたものである。

御かたちはさしはなれてみしよりもきよらにて、なつかしううちかたらひつゝ、おかしきゑあそひ物ともとりにつかはしてみせたてまつり、御心につく事ともをし給（大島本）

かほかたちはさしはなれてはつかにみ給しよりもいみしうきよらにうつくしけれは、なつかしうゝちかたらひて、をかしきゑあそひ物をとりにつかはして見せたてまつり給、御こゝろにつく事をし給に（中山家本）

父である兵部卿宮に先んじて、源氏は二条院に紫上を引き取ることに成功した。その後、改めて紫上の様子を見た源氏の印象である。この箇所は源氏のことを紫上が見たという説もあるが、通説に従って紫上の描写と判断する。見られるように中山家本では大島本よりことばを尽くして紫上のことを描写している。「きよら」の度合を強める「いみじ」であるとか、「うつくし」などのプラスの評価語は、ここでも紫上の美質を高める方向で機能している。なおこの源氏の行動を述べる部分でも、大島本より中山家本に待遇表現が多用されている点が目につくのはこれまでと同様である。

中山家本で紫上を追いかけていくかぎりにおいて、大島本でのように素性の明らかでない少女から、次にそれが知られ、やがて源氏に引き取られていくという過程に応じた描写、そして無邪気で純真無垢な少女としての人物造型というものは見い出しにくい。表現の方法や効果というものを考えた場合、明らかに大島本の本文の方が劇的で深みがあると思われる。しかし、独立した中山家本の世界として読むならば、それはそれとして矛盾なく待遇され描写されているのである。そういった紫上像の享受もあったということであろう。

五　中山家本の価値

僧都、世のつねなき御ものかたり、のち世の事なときこえしらせ

給ふ。わかつみのほとおそろしうあちきなきことに心をしめて、いけるかきりこれを思ひなやむへきなめり。ましてのちの世のいみしかるへきおほしつゝけて、かうやうなるすまひもせまほしうおほえ給ものから、ひるのおもかけ心にかゝりて恋しければ（大島本）

そうつ、世中の御ものかたりきこえ、のちのよの事のふかきなときこえしらせ給へり。我御つみのほとをそろしうあちきなき事におほしめして、いけらんかきりこれをゝもひなやむへきにもあらさめり。ましてのちのよはいみしかりぬへき事ゝおほしつゝけて、かやうならんすまるもいとせまほしうおほさるゝ物から、ひるのをもかけは心にかゝりていみしうこひしうおほえ給（中山家本）

中山家本の本文は解釈が難しいものである。初めて紫上を見、なんとか彼女を引き取って自分の思うままの女性に育て上げたいと願う源氏は、その後僧都から法話を聞く。ここで源氏の心中に注意したい。僧都の「世の常なき御物語」を聞いて、源氏はわが行動をふりかえることになるが、「わかつみのほと」とまず思い起こされるのは藤壺のことであった。大島本では自らの罪に対して「おそろしう」感じ、どうしようもないことばかりを思い、生きている限りこれを思い悩むであろう、と論理的かつ道徳的に反省している。しかし、ここで別本の中山家本（陽明文庫本も同じ本文）ではまったく逆の考え、つまり生きていく限りこれを思い悩むべきものでもないだろう、と語っているのである。これでは源氏はより楽観的に現世を生きているとしか読み取れない本文である。後世での苦しみはさておき今の願望を優先させる源氏の姿がここから浮き上がってくる。直後の「ましてのちのよは」以下の本文とのつながりが解釈しにくいので、あるいは誤写か改変があるかもしれないが、源氏の罪障意識を考える際の例として問題提起的な本文としてあげておきたいと思う。

本稿で中心的に取り上げた中山家本は、中山輔親氏旧蔵の鎌倉時代書写の零本七帖のうちの一帖である。池田利夫は「中山家本源氏物語の諸伝本」（『源氏物語の文献学的研究序説』一九八八年、所収）という論文で、中山家本が部分的に源氏釈引用本文に近く、また源氏物語絵巻詞書の若紫巻の断簡（福田嘉兵衛氏蔵）にも極めて近いことを報告された。そして次のように述べる。

釈などと併せて考えると、院政期の源氏物語本文の一端をこの中山家本が伝えていて、河内本が、かなり有力視して採用した本文を伝えているのではないかとの期待を抱かせるのである。

伊藤鉄也「『若紫』の別本―中山家本の位相―」（『源氏物語受容論序説』一九九〇年、所収）においても、源氏釈および伝阿仏尼本などといった平安末期頃かとされる諸書と中山本の近親性が指摘されている。必ずしも書写年代の古いものに正当性があるとは限らないものの、定家以前の源氏物語の姿を伝える可能性のあるものとして系統の解明にとって重要な存在となることは間違いないだろう。

河内本との関係については本稿ではほとんど触れなかったが、特徴ある箇所で中山家本と一致するものが多かったことをいいそえておく。しかし、これらとは異なる本文も多数有するため、これを河内本系の一つとすることはできない。本文の質や表現としての優劣という点では、依然青表紙本系の大島本の方が劇的で論理的に精選されていると思われるのであるが、本文の素性という点で中山家本の本文も異端として簡単に捨て去ることはできない。さらに後考を期したい。

注

1 『源氏物語大成』『源氏物語別本集成』『河内本源氏物語校異集成』に収録されている諸本は以下の通り。便宜的に現行諸本分類名称にしたがって列挙しておく。

【青表紙本】

大島本（古代学協会蔵）
御物本（東山文庫蔵）
横山本（横山敬次郎氏蔵）
榊原家本（榊原家蔵）
池田本（桃園文庫蔵）
肖柏本（桃園文庫蔵）
三条西家本（三条西家蔵）

【河内本】

七毫源氏（東山文庫蔵）
高松宮家本（国立歴史民族博物館蔵）
尾州家本（名古屋市蓬左文庫蔵）
鳳来寺本
大島本（中京大学図書館蔵）
岩国吉川家本（吉川史料館蔵）

【別本】

中山家本（国立歴史民族博物館蔵）
陽明文庫本（陽明文庫蔵）
麦生本（天理図書館蔵）
阿里莫本（天理図書館蔵）
保坂本（東京国立博物館蔵）
国冬本（天理図書館蔵）

2 『朝日古典全書』（朝日新聞社）、『日本古典文学全集』『新日本古典文学全集』『定本源氏物語』（以上、小学館）、『新日本古典文学大系』（岩波書店）など。

3 源氏物語玉の小櫛の引用は大野晋編『本居宣長全集』第四巻（昭和一九六九年）による。

4 伊藤鉄也「別本中山家本『若紫』における藤壺の苦悩」（『源氏物語受容論序説』一九八九年、所収）

5 主観客観の総合的表現については、時枝誠記の『国語学原論』（一九三一年）や『日本文法口語篇』（一九五〇年）、『古典解釈のための日本文法』（一九五九年）などに詳しい。

6 「国文学」一九九四年九月号が「古典の敬語を考える　解釈へ」という特集を組んでおり、待遇表現の運用面に光を当てようとする流れが一層

顕著である。

7　犬塚旦「源氏物語における理想美の問題　『めでたし』をめぐって」（『王朝美的語詞の研究』一九七三年、所収）

8　時枝誠記の「場面と敬辞法との機能的関係について」（『文法・文章論』一九七五年、所収）を見ると、次のように述べている。「敬語が敬意の表現でないとしたならば、その本質は何処にあるかと言ふならば、私の結論を先に言へば、右列挙した所謂敬語の名詞動詞の如きは、実は敬意の表現ではなくして、事物のありかたに対する特殊なる把握の表現であると考える。」

9　拙稿「若紫巻の本文」（『中古文学』第四八号、一九九一年一一月・『源氏物語の本文と表現』二〇〇四年、所収）において、待遇表現の用法という面から大島本、尾州家河内本、陽明文庫本、中山家本、麦生本、阿里莫本の本文の調査を行なった。結論のみを整理しておくと、物語の表現効果を考えた段階的相対的な待遇表現の使用法の有無、および平安時代中期の待遇表現法との比較などから、青表紙本系の大島本に古態を見い出すことができるとした。そして中山家本などの別本には、後世の書写者が物語の先行理解に基づいて待遇表現を補強したりしたものや、書写者の時代の言語規範に基づく本文の改変や誤りがあるだろうと考えた。

10　玉上琢彌博士「敬語の文学的考察」（『源氏物語研究』一九六六年、所収）

秋山虔氏「源氏物語の敬語」（『王朝の文学空間』一九八四年、所収）

11　注9に同じ。

※第二節引用箇所の補足資料

みつきはかりになれはしるくみたてまつりしる事ともありて人は思ひもよらぬ事なれはいまゝてそうせさせ給はさりけること〻おとろき〻こゆるにあさましかりける御身のすくせの程いかゝおほし〻らさらん御ゆとのなとの程にもしたしうつかふまつりて何事の御けしきをもしるく見たてまつれる御めのとの弁命婦なとはかりあやしく思わく事なれとかたみにいひあはすへきにあらねは猶のかれかたかりける御すくせをそ命婦はあはれにもおもふ（陽明文庫本）

みつき斗に成給へはいとしるきほとにて人々み奉りとかむるにあさましき御すくせのほと心うし人は思よらぬ事なれは此月まてそうせさせ給はさりける事とおとろき聞ゆわか御心一にはしるうおほしわく事も有けり御ゆとのなとにもしたしうつかうまつりて何事の御けしきをもしるく見奉りて（て見消）しれる御めのとこの弁命婦なと斗そあやしと思へとかたみにいひあわすへきにあらねはなをのかれかたかりける御すくせをそ命婦はあさましと思ふ（麦生本）

み月はかりに成給へはいとしるきほとにて人々み奉りとかむるにあさましき御すくせのほと心うし人は思よらぬ事なれは此月まてそうせさせ給はさりける事とおとろき聞ゆわか御心一にはしるうおほしわく事もありけり御ゆとのなとにもしたしうつかうまつりてなに事の御けしきをもしるくみ奉りしれる御めのとこの弁命婦なとはかりそあやしと思へとかたみにいひあはすへき

にあらねは猶のかれかたかりける御すくせをそ命婦はあさましと思ふ（阿里莫本）

三月になり給へはいとしるきほとにて人々みたてまつりとかむるもあさましき御すくせのほと心うし人はおもひよらぬ事なれはこの月まてそうせさせ給はさりけること〻おとろき〻こゆわか御心ひとつにはしるうおもほしわくことも有けり御ゆとのなとにもしたしうつかうまつりて何ことの御けしきをもしるくみたてまつりしれる御めのとこの弁の命婦なとのみそあやしうと思へとかたみにいひあはすへきにあらねは猶のかれかたかりける御すくせをそ命婦はあさましとおもふ（保坂本）

三月はかりになれはしるく見たてまつりしること〻もありて人はおもひもよらぬことなれはいま〻てそうせさせたまはさりけること〻きこゆるにあさましかりける御身のすくせのほといか〻おほし〻らさらん御ゆとのなとのほとにもしたしうつかうまつりてなにことの御けしきもしるく見たてまつれる御めのとの弁命婦なとはかりそあやしく思わくことなれとかたみにいひあはすへきことにしあらねはなをのかれかたかりける御すくせをあはれにもおもふ（尾州家本）

（日本文学・文化専攻：助教授）